

葬送のゆくえ

第3部

血縁から「結縁」へ

1

死後を誰に託すのか

東京都内のイベントホール。白と桜色の二つの棺の前で人垣ができていた。順番に棺の中へと入っていく。

「意外と寝心地いいわあ」「おおっ」

ピースサインをして友人に携帯電話で記念写真を撮ってもらう人、神妙に手を組み目をつぶる人、本格的に試着用の死に装束を着て臨む人……。さまざまに「自分の死」を疑似体験する。8月に終活カウンセラー協会が開いた「終活フェスタ」。「入棺体験」はその目玉だ。

自分の最期の迎え方を考え、準備する「終活」への関心が高まり、イベントやセミナーで積極的に情報を集める人が増えている。

終活フェスタは終活イベ

「終活」ブーム



「終活フェスタ」の入棺体験。「自分の葬儀」へのイメージを膨らませる(8月、東京都内)

ントの「国内最大級」(同協会)。葬祭、海洋散骨、生命保険など約40社が出展、初開催の昨年は「終活ブーム」として全国ニュースでも取り上げられた。来場者は60代以上のシニア層が中心だが、30、40代とみられる人も少なくない。

家族と参加した都内の40代の女性は「終活? 関心ありません。人間、いつ死ぬかなんて分かりませんから」。昨年約2100人だった来場者は今年約3200人に。これまで1日だけだった日程を来年は2日間にするという。

元気なうちに自分の死について考え、準備する。こうした動きは以前からあった。例えば「生前葬」。1993年に俳優で映画プロデューサーの水の江滝子さんが「生きているうちに皆さんの顔を見ておきたい」と

行い、話題を集めた。その後生前葬は続いたが、あくまでも著名人など一部の人のもの。多くの人手にとって、「縁起でもないこと」であり、死後のことは「家族が考えるべきこと」だった。

いまはどうだろう。高齢化と核家族化が進んだ結果、65歳以上の高齢者がいる世帯の半数以上は夫婦のみか独居に。国立社会保障・人口問題研究所の予測によると、生涯未婚率は、2030年には男性30%、女性23%まで増える。

「死後のことは家族が担う」という前提は崩れつつあるのだ。散骨や樹木葬、葬儀をせず火葬だけで済ます「直葬」の増加と、葬送の多様化は

進む一方。伝統や慣習から自由になった分、自分で選択しなければならぬ場面が増えている。そこへ登場したのが「終活」という使い勝手のいい言葉。「就活」や「婚活」などと同様の明るい響きをまとって、今日の終活ブームの呼び水になった。「頼れる人がいない」「子どもに迷惑を掛けたくない」「自分らしい最期を迎えるために」

さまざまな動機から、人々は「死」を通して「生」と向き合う。寄る辺ない老後を自分らしく、充実させて生きていくために。

「個人化」する社会の中で、家族だけで老年期から死後までを支えることは困難になっている。誰もが安心して最期を迎える手だてとは。最終シリーズは、血縁に代わる新たな支え合いのかたちを探る。

（編集委員・又川晃世）

葬送の

第3部 血縁から「結縁」へ

2

生き続ける「思い」

高知市の自営業、吉岡浩さん(61)―「仮名―がその手紙の存在を知ったのは、既に妻を見送った後だった。

家族の一人一人に宛てた手紙のほか、葬儀の希望、親しくしている人の名簿、形見分けに関する遺言、さらには自分の告別式の会葬御礼の文面も用意されていた。

「『余命3カ月』と突然宣言された直後に、よくこんなにも落ち着き、明るい口調で書くことができたものだ。わが妻ながら感心してしまいました」

吉岡さんは昨年4月、妻の美佐子さん―「仮名―を61歳で失った。

がんの中でも進行が早いスキルス性の胃がん。腹水がたまって病院を受診した

エンディングノート

時は既に手遅れの状態だった。

もしもの時に備えて「思い」を残す。その手段としてエンディングノートが注目されている。

終末期の医療や介護、葬儀、墓、相続などに関する希望、万が一の時に知らせ

たい人の一覽、家族へのメッセージ、自分史などで構成される。エンディングノートの書き方を学ぶセミナーもある。

遺言書のように法的な拘束力はないが、その分、自分の思いを自由に書き込めるといふメリットがある。

「終活」の必須アイテムとなり、市場は不況知らず。若い女性やビジネスマンの普及するきっかけとなった

のは2011年の東日本大震災という。

永遠に続くと思われていた日常が、人間のコントロールできない力によってある日突然終わる。たとえ若く健康であっても。自然災害の猛威の前では人間は無

力であり、生と死が隣り合うという現実を、私たちは目の当たりにした。

震災後、山根さんの元には県内各地からエンディングノートの書き方についての講演依頼が目に見えて増え、高齢者を中心に関心が高まっている。

ただ、ノートは手元にあっても、「気持ち定まらないとなかなか書けない」という声は多い。昨年全国の60歳以上を対象にしたある民間の調査では「書いて

ある」はわずか1.9%。

そんな人に山根さんは「書き直すことを前提に、延命治療や葬儀、墓に対する考えの方向性を示すだけでも、遺族の負担は小さくなる」とアドバイスする。メリットはこうした実用面にとどまらない。

「漠然とした不安がどこから来ているのか。書くことで考えが整理され、自分が残された人生で何をしたいのかが見えてくる」(山根さん)

そして、文字に込められた思いは、残された家族の悲しみを癒やし、家族の中でいつまでも生き続けることになる。

吉岡さんにとって、美佐子さんからの手紙がまさにそうだった。

「私への感謝の言葉がたたくさんつづられていて…。手紙があるから、妻をいまも一層、身近に感じるんです」

(編集委員・又川晃世)



「終活フェスタ」で展示されたエンディングノート。さまざまな種類が発売されている(8月、東京都内)